

北陸こども環境研究会とやま

富山で頑張る人めぐりオシャベリツアー2017

2017.05.01 北陸こども環境研究会ツアー

こども環境学会本部事務局の當本氏の来富に合わせて、「中央と地方」や「会員と一般各位」の交流を図る目的で、(こども環境について)富山で頑張っている方々巡りオシャベリツアーを実施した。以下に報告する。

日時 : 4月 5-6 日(水-木)

訪問場所 : 子ども施設 : 南加積こども園(上市町)

福祉施設 : 介護施設一休庵(富山市)、ひとのま(高岡市)、

伝統建築活用 : 大菅商店(高岡市)、吉久さまのこ屋(高岡市)、

コミュニケーションの場 : 朝活かみいち(上市町)、朝日美術館内喫茶こみち(朝日町)、

郷土拠点 : 郷土土産店味蔵 (上市町)、タラ汁屋(朝日町)

懇親会 : 回転ずし陣寿司(富山市)、四季料理華生(上市町)

コース : 1日目 一休庵 →景勝地氷見雨晴らし →ひとのま →大菅商店 →陣寿司

2日目 朝活かみいち →舟川桜景勝地 →タラ汁 →宮崎海岸

→喫茶こみち →味蔵 →南加積こども園 →華生

< 1 > 子ども施設

●南加積こども園(上市町) : 上市町では公営のこども園が次第に時代の波に飲まれ、民営化として指定管理制が昨年導入された。これに商業主義の団体が(めざとく)飛びついたので、地元では危機感が募り、急きょ地域在住の本会会員児玉さん(スタジオじゅう主宰)が手を挙げ、「地元のことは地元で」をモットーに町内住民から熱い応援を受け指定管理者にめでたく選ばれた。そして文字通り地域立の園がこの4月から新米ほやほやで運営されている。

そんなところに一行が訪れ、児玉さんを激励するとともに、園の職員の方々と子ども問題を語り合い、また子どもたちとじゃれつき遊びで楽しんだ。もともと、小学校を改装した園ゆえに空間的には余裕がありすぎるくらいあり、そんな広い空間を元気に走り回る子どもが実に印象的であった。



< 2 > 福祉施設

●介護施設一休庵(富山市): 富山市四方にある介護施設「一休庵」にお世話になっている本会会員(友人)夫妻を訪ね、大いにおしゃべりを楽しんだ。また昼は昼で、施設の食堂にてバイクが昼食をおいしく食した。

この食堂は、外にも開かれており、その意味では施設が外界と繋がっているといえる。事実、外から何人ものお客が美味しいバイクが目当てに来店しており、一行の方々と交友関係のある福祉の方や音楽家の方などと偶然にお会いすることができ、歓談に花が咲いた。

やはり、元気の源はおしゃべりと食べ物である。友人は一休庵でみるみる元気になり、自宅帰還も近いとのことであった。何よりもうれしい限りである。



●ひとのま(高岡市): 高岡瑞龍寺の参道沿いにたまり場「ひとのま」がある。これを主催するのは、草の根的なコミュニティ必要性を説く宮田準さんである。宮田さんは小さい頃に虐待を受けたからこそ大人になってからは何とかしたいとの思いをもって、誰もがごく普通にありふれた日常のコミュニティに身を置けるよう、寺子屋とかコミュニティハウスといったイメージで人が自由に集まりただ居める場「ひとのま」(人間を訓読み)を2011年に二階建て一軒家で実現させ今日に至っている。

ひとのまは、集まってくる方々が訳有り無しにかかわらず、評判を聞きつけた子どもや若者など種々であり、時には日に50人にも及ぶという。彼らは、自分の居場所を求めてやってくるのである。そんな居場所では、誰かからいらっしゃいと声かけられることもなく、我が家にやってきたかの如くごく自然に居ることが出来る。そこに居れば、皆さん仲間であり、あたかも幼年期に互いに名乗らずとも一緒に遊んだあの感覚が蘇る。しかも、ひとのまには「自分の使った食器は自分で洗う」という以外にルールが無い。わが家にあるルールよりゆるいルールかもしれない。それも宮田さんが忘れていたところに、『「自分の使った食器は自分で洗う」というルールがあるでしょ』とそこに居た子どもに指摘されていたので、当初からあったルールでなく、そこに居る子どもや若者などが決めたルールのようなものである。

プログラムが有るわけでもないが、不思議と一人で過ごす人がいない。居る人たちが自然と皆さんを慮り培っていくいくつもの人間(人)の輪が自然と育まれている。

宮田さんはよく福祉関係の見学者から「ルールを張り紙して」といわれることが多いというが、ひとのまの理念が分からない方には人の輪なんてことに気づくことは無い。そんな方々が福祉を推進というから先が思いやられる。一行はそんなこと切実に感じた次第である。

今少し、ひとのまの様相を紹介する。まずびっくりはひとのまが24時間365日いつでも

カオプンの状態にして、引きこもりやコトの方々には現代版駆け込み寺ともなっていることである。そんな小さな居る場には、若い方々からおじちゃんまで、宮田さんのもとに居している。皆さん実に生き生きとしている。恋恥ダンスを踊ったり、押入れの布団に乗って遊んだり、音楽を奏でたり、コーヒーを皆さんに提供したり。一行は Café「なまけっけ」のコーヒーをご馳走になった。それにもうひとつのびくりは、二階は DV で家に帰れない方々の生活の場となっていることである。

宮田さんの個を大事にする姿勢にただただ敬服であった。なお、ひとのま事業は行政から支援をいただいているという。



< 3 > 伝統建築が生活の場

●高岡山町筋の蔵の街: 高岡に惚れ込んだ UJ タン組の大菅夫妻は、町家改装の古と新が同居する街風のコーヒー処や土蔵改装の小間物商い処で地域に根付いて生活を営んでおられる。こうした夫妻の着飾らないほのぼのした心意気が街並みに活力となって沁みだしているかのようであった。

我ら一行は伝統の街の活用や子どもの日常生活について夫



妻と歓談した。特に子どもに関しては、子どもの遊び場の一つとして街の一角に蔵で囲まれた中庭付きの場があり、子どもが楽しんでいるとのことであった。(暗くなっていたので現場に入れず)

●吉久さまのこ屋(高岡市)：高岡吉久は庄川の下流域の港と蔵の街であり、かつては加賀藩の米積み出しで賑わい、当時の古風な街並みがあまり改変されずに今日まで残っている。その街並みに、「さまのこ」屋という囲炉裏のある町家づくりのお茶屋(コーヒー店)があり、地域の方々の茶の間になっている。一行は、そこの主であるおばちゃんとは短時間ながらも、地域に根付いた心意気を肌で感ずるコミュニケーションを楽しんだ。



< 4 > コミュニケーションの場

●朝活かみいち(上市町)：

朝活かみいち(上市町)は第一と第三の木曜日の7時から8時まで、おしゃれな喫茶店を借り切って富山の若者が集まり、毎回テーマを決めて進行役と呼ばれる講師を中心に参加者全員で知的交流を楽しむ場である。FBで進行役とテーマが告知され、それを見てくる方々、口コミで来る方々、地元上市半分、富山から半分の方々が集まっている。もちろんメンバーは固定されていないだけに、会場には自由な雰囲気漂っている。



今回は、椀澤さんがテーマ「フードとは」で知的交流となった。進行役はアレルギー対策で始めたのがいつの間にか生(卵)に魅せられ、卵の料理を作って食し楽しんでいるとのことであった。話題提供後も、アフタートークとして11時頃まで種々話題で熱く談義が続いた。もちろん、一行も会場の皆さんとともに生活や環境など自由闊達に談義を楽しんだ。

●美術館内喫茶こみち(朝日町)

朝日ふるさと美術館横の喫茶「こみち」で主宰のご夫婦と歓談。このお店は地域のたまり場である。ご近所さんから種々プロの方まで客層が多様であり、一行が訪れた時には手芸愛好の方々やヒスイ博士の方



がおられ、もちろん皆さんと歓談した。たまたまヒスイ博士がヒスイを持参しておられたので、當本さんはヒスイ一個をいただいた。重量あり気品ありのヒスイはやはりヒスイであることを実感した次第である。

< 5 > 郷土拠点

●郷土土産店味蔵（上市町）： 上市に戻り、もともと行政の外郭団体が町起こしの一環で始めた土産物専門店「味蔵」が 2 年前に民営化され、町起こし大好き人間が集まって運営され今日に至っている。

一行が訪れた時は、おもしろオーナーが不在であったにもかかわらず、若き女性店主が切り盛りしていて、歓談しながらの買い物ができた。しかも、店主は上市名産の「九宝茶」をふるまってくれ、地域に根差した思いが熱いコミュニケーションとなって、お互いに楽しむことができた。



●タラ汁屋(朝日町)： 宮崎海岸での遊び前に腹ごしらえとして海岸の直近にあった食堂に入り、当地の名物「タラ汁」を食した。もともとタラ汁は漁師の昼食であり、鍋にタラをいれて煮込んだだけではあるが、その素朴な味は食べた人でないとわからないものである。食堂のおばちゃんと折角だからといって、素朴な味、出身地の風情などについて、楽しく歓談した。



< 6 > 懇親会

●回転ずし陣寿司(富山市)： 富山呉羽の回転寿司にて早川おじさん、飯田さんたちと共に夕食。富山の回転寿司は東京の料亭並みの味であり、しかも安いのである。一行はしゃべりまくり、たらふく食した。満足満足。



●四季料理華生(上市町)： 料理「華生」にて夕食。町一番の日本食を提供するお店である。板長が朝活かみいちで「すまし」の味を皆さんに振る舞ったこともあって、今回わずかの時間ながらも板長の「和食でなくなぜ日本食か」について語りが始まり、我らの生活における食こそが日本食そのものといった話や、日本食をベースに美味



しさと自然を追求した等々の話で、歓談を楽しんだ。

料理の内容については、ホタルイカのしゃぶしゃぶを始め旬なものばかりで、おいしい食事で味を堪能するとともに、皆さんで語りあいを楽しんだ。満足満足。



< 7 > 観光

今回はおしゃべりツアーながら、頑張る富山人の原風景探訪として名所旧跡の観光をも楽しんだ。

●新湊内川にて東洋のベニスといわれている風情を鑑賞。当該地には、河川堤防がなく、川幅が10-20mと割合狭く、居住地を流れているとあって、生活感が河川を含めて漂っているところが美しく感動的である。



●氷見雨晴らしにて海越しのうっすらと見える立山連峰を鑑賞。「陸+海+山」という構図は日本広しといえども富士山と立山の二か所だけである。氷見の場合、島がアクセントとなり、かつ比較的狭い平野扇状地形により立山が屏風となって立ちはだかる(立山の仰角が割合大きい)という、実に幻想的な光景をつくりだしている。



●宮崎海岸でヒスイ探し。北アルプスが日本海に沈没する場所が親不知である。この地の富山側に朝日町宮崎海岸がある。姫川のヒスイが流れ着くのは全国でも糸魚川海岸と宮崎海

岸の二か所だけである。このため全国から、ヒスイ探しに(ヒスイを求めて)多くの方々が訪れている。我ら一行も御多分に漏れずヒスイを求めて海岸で「らしきもの」をいくつか発見しゲットした。後に専門家の鑑定を受け、ヒスイにあらずとの判定にがっかり。でも、色づいた石は糸魚川とここだけにしかないとのことで、らしきものもしっかりと持ち帰った。

●朝日町舟川沿いの四重奏(畑のチューリップ[°]、畑の菜の花、河川堤防の桜並木、白銀の山)を鑑賞。砺波のチューリップ畑のような商業用畑とは違って、当該地のお百姓さんが皆様の目を楽しませたいとして広い範囲にチューリップ畑と菜の花畑をつくった。桜の開花の頃に、チューリップ[°]の赤



などの色、菜の花の黄色が桜並木の桜色と朝日岳連山の白銀の計四色のパノラマが実に圧巻であり、地元では四重奏と称して大事にしている光景である。これが何時しか全国に知れ渡り、今では多くの観光客がやってきて楽しんでいる。



■■ おわりに、ツアーのまとめとして當本さんの談話を掲載する。

上市町の日本料理や華生さん。富山の海の幸山の幸を素材の味を大切に丁寧に仕上げたお料理。写真は今が旬のホタルイカのしゃぶしゃぶ。40代 50代 60代の年齢差がほどよく混じって楽しいひととき。社会福祉法人光南会 理事長の児玉巧さんは今年から民営化された保育園の運営を始められた。体操のお兄さんでもある。夢を形にされた方。今回は、夢は叶うの元気を若い方からいただいた旅でした。

最後に、使用した写真は一部 HP やいただいたものであることを断っておく。(内川、味蔵、雨晴らし、大菅商店、華生)